

追悼



追悼 仁科浩二郎先生を偲んで

中西 友子

Nakanishi M. Tomoko

仁科浩二郎先生が亡くなられたと伺い、悲しい気持ちでいっぱいです。仁科浩二郎先生といえば、日本初のサイクロトン作成者で湯川博士や朝永博士を育てた著名な物理学者である仁科芳雄博士の次男で、父親同様、物理、特に炉物理に関する研究をされてきた研究者です。先生はいつもユーモアに溢れ、人に優しい素晴らしい研究者でした。

先生は1932年に東京にお生まれになり、旧東京教育大学附属高等学校から東京大学理学部物理学科に進学され、その後、当時米国で原子炉物理では最も優れていたミシガン大学で博士号を取得されました。その後、日本に戻ってきてからは名古屋大で長年教授を務められました。ミシガン大学では関係のある研究者が亡くなった場合には滅多に追悼文を集めないのですが、仁科先生の場合には、特別に声がかかり、共同研究者でかつ定年になったばかりの原子力工学の教授3人が追悼の文を寄せられました(Prof. David Wehe, John Lee, Bill Martin)。いずれの方も仁科先生が研究者として優れていたことと合わせて、素晴らしい人格の持ち主だと書かれています。

先生は単に英語がうまいということだけではなく、英語でウィットに富んだ話をされる方でした。当時、英語で挨拶される方は多いものの、原稿なしの英語の挨拶にウィットを入れ込んだものは殆ど聞いたことはありません。

筆者と仁科先生とのとても大きな思い出は、何と言っても2016年に、ストックホルムでのJSPSのシンポジウムにご一緒したことです。行きの飛行機の乗り継ぎでは、真夜中の時間帯と一緒にフランクフルトの空港で次のゲートに向かって長い距離を歩きました。先生はコロのついていないとても重い旅



写真 2016年JSPS会議で、左から仁科先生、Prof. Imre Pazsit、筆者

行鞆を手に2つ提げて歩いておられたのですが、あまりに重いので途中でコロのついていない大きなスーツケースを購入して中身を移されました。その時に荷物がなぜ重いのが分かりました。分厚く大きくて重い木の下敷きと木の定規が入っていたのです。どこへ行ってもきちんと定規を使って文章を書く、その習慣をお持ちだったのでした。

シンポジウムは、雪の中、スウェーデン王立工科大学(KTH)で行われたのですが、会場はかつて研究用原子炉が設置されていた地下25mのところでした。施設に入り、まず、小さな部屋かと思われるところで片隅に机がある場所に行き、簡単な扉を閉めるとその部屋ごと下に下がっていきます。何とエレベータだったのです。かつては色々な機材を運んだのでしょうか。1階が6階となり、深い穴の底が天井の高い会場となっていました。

先生は、父である仁科芳雄博士の貴重な資料を踏まえて話をされました。仁科芳雄博士がクライナー仁科の公式を発表するまでのクライン博士との手紙や、ニールス・ボーアとやり取りした手紙、それに長岡半太郎がノーベル賞委員会に受賞者として推薦した人のリストの中に湯川秀樹博士がおられた手紙など、現代のようにメールのやりとりなどが無かった時代なのに、お互いを実によく知っていたことは驚きでした。

そのような父上と育った仁科浩二郎先生ですが、実に優しさに溢れる方で、その愛情の深いお人柄が偲ばれます。金沢文庫のご自宅の近くでチャルマーズ工科大教授のImre Pazsitさんと一緒にお会いすることがあったのですが、その際も彼のお孫さんをまるで自分の孫のように親しく話されていました。

このように先生を偲んで皆さんが先生のお話をする間は、先生は関係者の方々の心の中に確実に生きています。どうぞ安らかに眠られつつ、先生の思い出話をどこかで聞いてくださるようお願いいたします。

(東京大学名誉教授・特任教授/星薬科大学名誉教授/福島国際研究教育機構監事)

仁科先生のご略歴はp.45「ISOTOPIC」をご参照ください